



元気のもとにつながる仲間

8月×日

仕事から帰ると、分厚い封筒が来ていた。宛名を見ると「外川正明」とある。その瞬間、「ああ、出たんだ」と直感した。封筒を開けると『元気のもとにつながる仲間』という本が出てきた。

パラパラとめくってみた。そこには差別と闘うたくさんの人たちの熱い思いがあふれていた。

* * *

この本は、2005年4月～2009年3月の足かけ4年間、雑誌『解放教育』に同タイトルで連載されたものを一冊にまとめたものです。内容は、著者である外川さんが今まで出会ってこられた人々を、外川さんなりの切り口で紹介するものです。

「風の人・土の人」という表現を借りるなら、この連載に登場されている100人を超す人々は、おそらく全員が「土の人」です。決してどこかでスポットライトを浴びるような人々ではありません。外川さんからこの連載についての感想をたずねられた時、わたしは次のように返しました。

あの連載は、ほんとうに地道なところでコツコツととりくまれておられる方々にスポットをあてられた、とても大切な記録だと思います。もしかしたら、日本の同和教育史というものが仮に何十年かあとにあるとするなら、そこに残るのは全同教と文科省の歴史だけになるかもしれない。そんな中で、貴重な資料になるのではないかという気がします。

歴史をとらえる時、ともすれば組織や法律の変遷に目を向けがちです。しかし実際には、無名のたくさんの人々の日常の営みの中に歴史はあるという思いで書かせてもらった感想でした。

実はわたしも2007年8月号の連載第28回目に紹介してもらいました。タイトルは、「『ひとりでない』ということが生み出す『力』を感じて」。

わたしを紹介して下さるにあたって、外川さんから「自分の思いを2000字にまとめて」と依頼されました。でも実際に送ったのは5500字でした。

これにはそうとう困られたみたいです。でも、どれだけがんばっても5500字以下に削ることができなかったのです。なぜなら、今のわたしが「わたし」になるために、本当にたくさん「つながる仲間」との出会いがあったということ、誰よりもわたし自身がよく知っていたからです。

わたしは教員になった当初、生徒達とつながりたいとは思っていたものの、なかなか本当の意味での「つながり」ができませんでした。そんなわたしを変えてくれたのは、前任校で部落の子どもたちとかかわり続けてきたMという教員との出会いでした。Mさんのおかげで、校区の部落の人々と出会うことができました。まだまだ駆け出しだったわたしを、部落の人々はあたたかく受けとめて下さり、支え続けて下さいました。そんな人々に囲まれて、わたしは伸び伸びと実践を積み重ねることができました。

一方でMさんは、在日朝鮮人の生徒と出会うきっかけも与えてくれました。子どもたちから何度も拒否されながら、けっしてめげることがなかったのは、今にして思うとMさんの存在があったからだと思います。そうした在日朝鮮人の子どもたちとの出会いが、現在とりくんでいるトランスジェンダー生徒交流会につながっています。

また、ほんの小さなきっかけから、同じ学校で勤務していたTさんから「自分はゲイである」と話してもらいました。Tさんとの出会いは、「トランスジェンダー」という言葉との出会いのきっかけでした。この言葉との出会いは、わたしを「わたし自身」と出会わせてくれ、トランスジェンダーの仲間と出会わせてくれ、セクシュアリティについての知識と出会わせてくれました。

たくさんのお出会いのおかげで、今わたしは全国の何百人という仲間と囲まれて、ここにいます。

「元気のもとにつながる仲間」。そんな仲間をともに作りだしていきましょう！

(土肥いつき 高校教員)